
SEED

ズタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SEED

【Nコード】

N1071W

【作者名】

ズタ

【あらすじ】

特殊能力「SEED」を所有する主人公「滝川 薫」は表向きは高校生、裏向きは「黒き暗殺者」ブラックカーネイジとして活動している。何が正義で何が悪か、何が正しく何が間違いかを葛藤しながら自分の正義を貫きながら能力者達や悪党達と戦うお話。

プロローグ「黒き暗殺者」（前書き）

自分はただの学生なので小説を書くのは初めてですが頑張って書きたいと思います。この作品は一応色んな視点で見る作品です。その内の一人のお話です。自分のペースで書くので長く待たせたりしてしまいます、その辺は温かい目で見てください。少しずつ投稿するつもりです。投稿間隔はランダムです。

プロローグ「黒き暗殺者」

プロローグ

ブラックカーネイジ

「黒き暗殺者」

悪。それは弱者を力で抑え付ける者のこと。

悪。この世から消えなき者。

だから、裁くのだ、彼らを。弱者を痛めつけ、弱者を騙す悪を。

彼らを裁くことに何の躊躇もしない。同じ人間でも中身が違うのだから、悪はそう簡単に変わらない。だから裁きを与える、殺しはしない。そして気付くはずだ、それは悪いことであると、いつかきつと気付いてくれるはずだ、あの憎い奴らも。自分たちが犯した罪に気付くはずだ。だから裁く。悪はこの世に存在してはいけない。死の恐怖と言う鎖を作るのだ。そうすればいつかきつと…、悪意をもつて悪事をしないはずだ、罪を背負おうとするはずだ、そういつか、だから俺は悪を裁く偽善者になるのだ。

プロローグ「黒き暗殺者」(後書き)

お読みになってくださってありがとうございます。

変なところやかしいところがあったら指摘してくださいとありがたいです。感想や質問をどんどん書いてくださって構いません。それでは次回をお楽しみください

「いてて、あ、ごめん！大丈夫！？」

急いで起き上がって衝突した人に手を差し伸べる。

「すみません、考え事してたもんで…」

「いえ、こちらこそすみません」

そこで初めて目が合った。金髪の可愛い女の子だった。

可愛い子だなあ…。ってそんなこと考えてる場合か！

「あの、大丈夫ですか？」

少しぎこちなく聞いてみる。

「はい、なんともないです…」

女の子も何故かぎこちなかった。何故だろう？ふと街の時計を見ると30分前だった。頭を切り換えて落ちた荷物を慌てて拾った。

「すみません！時間が無いんで俺はこれで！」

女の子がなんか言っていた気がするが適当に頷いてその場を去っ

た。学校に着くまでずっとぶつかった女の子のことを考えていた…。

出会い？（後書き）

お読みになってくださってありがとうございます。

変なところやおかしいところがあったら指摘してくださいとありがたいです。感想や質問をどんどん書いてくださって構いません。それでは次回をお楽しみください

出会い？（前書き）

今回新しく出るメインキャラ紹介

リンダ・リンス 15歳

今作のメインヒロイン。明るくて積極的な性格。薫に一目惚する。

天野 秋 アキノ 15歳

リンダの親友で良き相談相手。友達には優しいが他人にちょっとキ

ツイ性格。

祭木 光 マツリキヒカル 17歳

しっかりとした性格で頼れる姉のような存在。その反面頑固なところがあるのが玉に瑕。

天宮 御門 アマミヤミカド 16歳

いつも読書していて自分から行動しない。感情を表に出すことが無く落ち着いた性格。

出会い？

「行っちゃった……」

その言葉を発し終わった時には薫の姿はもう少女の視界には居なかった。人混みで見えなくなったかもう見えないとこまで行ってしまったかのどちらかだろう。ぶつかった拍子に落ちた薫の携帯を見つめながら少女は自分の気持ちを整理していた。

何だろうこの感じ…、ドキドキする。一目惚れ…？確かに格好良かったけど…、何か違うんだよね。格好いいからとは違うんだよね。何だろう…変な感じ。

自分の気持に戸惑いながら少女…リンダ・リンスは待ち合わせしているお気に入りのお茶に向かった。

「本当に大つきいねえ…」

私は目の前にある巨大なパフェを見ながらそう言った。

「流石に予想外の大きさだわ…。念のため四人で来て良かったわね…。」

誘った本人の光も青ざめている。その反面光の隣のミカは平然な顔で「そお…？」って言うてる。自信でもあるのかと思ったけどミカのキャラでは良く解らない。

「ねえミカ、もう少し驚いたりしたら？」

「…別に」

「女の子ならこう明るくなくちゃ」

大げさに可愛い仕草をしたが見事にスルーされた。何か言ってくれないと逆に恥ずかしいよ…。

「そんな事より食べよ？」

隣のアキが私を宥めながら切り出した。

「そうね、折角の休日が無駄になったら元も子もないしね。ちやっちやと食べましょ」

数十分後にはほとんどパフェが無くなっていた。

「意外と行けたわね」

「そうだね」

「ミカも意外と食べたし。好きなの？」

「スイーツは好き…。」

わんやわんや喋りながら残り少ないパフェをみんなで少しずつ食べ見事に完食した。

気が付くと外には始業式を終えた学生達が歩いてた。今朝ぶつかった学生の事を思い出し携帯を取り出した。そういえば落とした携帯もちつばなしだなあ…。

「あれ？リンダってそんな携帯もってたっけ？」

「ん？ああ、これ？今朝ぶつかった学生の落とし物」

「へえ、ちょうど帰りの時間だし返しに行ったら？」

「でも学校先が分からないし…。」

「落とした場所にまた来るだろうし、そこで待ってたら？顔は覚えてるんでしょ？」

「まあ、一応は…。」

今朝の事を思い出していたらまたドキドキしてきた。…まさか本当に？

「どうしたのリンダ？」

「えっ？ううん何でも無い！じゃあ私少し行ってくるね！」

少しでも早くここを出たかったからちよつと急いで出る。

「お会計お願いね！」

手を振りながら私は喫茶店をさった。ドキドキする気持ちを抑えながら…。

出会い？（後書き）

お読みになってくださってありがとうございます。

変なところやかしいところがあったら指摘してくださいとありがたいです。感想や質問をどんどん書いてくださって構いません。修正を入れる可能性あるのでご了承ください。それでは次回をお楽しみください

出会い？

現時刻1時半過ぎ。

リンダは薫の携帯を拾った時計の前に立っていた。

私は空を見ながらぶつかった子の事を考えていた。

本当に好きになってるのかな？本当に一目惚れしてるのかな……？
どうなんだろう……？結局は分からない。………また出会えば
分かるよね。きっと……。そんなことを考えてたら声をかけられた。
でも目的の人では無かった。

「君一人？だつたら俺らと遊ばね？」

面倒なのに捕まっちゃったな……。

「私、人を待ってるんです」

「いいじゃんかよ、そんなやつほつといてさ」

「……私に構わないでください」

「そんなつれない事言うなよ。そんなことより遊ぼうぜ」
いきなり腕を掴んできた。

「離してください」

「今のうちに言う事聞かないと痛い目みるよ嬢ちゃん」

面倒くさいなあ。能力使つてノシちゃうか？でもここじゃ人目を
引くし。どうしよう。誰かが助けてくれるのが一番なんだけどね。

……そんな勇氣ある人居るわけ無いよ。

そしたら何故か今朝ぶつかった子が思い浮かんだ。……まさか、そ
んな都合良く来てくれるわけ……。

「おい、やめろよ。嫌がつてるだろ」

……え？

「何だよてめえ、ヒーロー気取りか？あ？」

「……ヒーロー……か、ある意味あつてるな」

もう一度良く見る。………やっぱり、今朝ぶつかったあの子だ。

「はあ？」

「そのままの意味だよ。それに、その子に用があるし、知り合いなんだ」

何で来てくれたんだろう。いや、携帯を探しに来てたまたまた来たのかな？

そんなことを思っていたら不良が私の腕から手を離し臨戦態勢になっていた。

「ああ、成る程。てめえが待ち人か。ちょうど良いてめえが居なくなりや遊べるって訳だ」

…何言ってるんだか。遊ぶなんて一言も言っていないのに…。きっと自己中な馬鹿なんだろうな…。

「待ち人？」

「てめえのことだろうがよ。とぼけてんじゃねえよ！」

不良がいきなり殴りかかってきた。が薫はそれを簡単に避けて、溝に一発ぶち込んだ。

「おげえっ!!」

「正当防衛成立…」

薫がそう呟き終わると不良は倒れた。

「てめえ！」

もう一人の不良がさらに殴りかかってきた。薫はそれを難なく避け…

「先に殴ってきたのはそつちだろうが、よ！」

見事にボディーブローが不良に決まった。

「おごあつ」

もう一人の不良も力なく倒れる。勝てないと悟ったのか、残った不良が倒れた不良達を抱え、

「くそっ！覚えてろ！」なんて捨て台詞を言いながら逃げていった。わあ、簡単に倒しちゃったよ。にしても動きが良い、良すぎる位に…。

訓練されてるのか身体関係の能力者かな…？

リンドは少し考える。最初に殴りかかれた時、不意打ちに近いのに簡単に避けた。さらに綺麗に溝に一発…。何かの訓練でも受け

てるのだろうか？それとも…

「ふう。君、大丈夫？今朝ぶつかった子だよな？」

「あ、はい。そうです」

不意に声をかけられたが冷静に対応し、すぐに思考を変える。

「やっぱり。あのさ、今朝ぶつかった時そこら辺に黒い携帯落ちてなかった？」

「これですか？」

リンダはそう言うとポケットから拾った携帯を取り出した。

「あ、それぞれ。ありがとう。拾っていてくれたんだね」

「あの時急いでたみたいだから渡せなくて持ってたんです」

「あ、あの時か。あの時登校初日なのに寝坊して遅刻しかけてたんで急いでたんだよね。ごめん」

彼はアハハと苦笑しながら頬をポリポリしてた。話しているとドキドキしてきた。

「……あの返してくれるかな？」

「え？」

私はまだ彼の携帯を握っていた。それに気が付くとすぐに彼に渡した。

「あつ、ごめんなさい！」

「んっ、ありがとう。それじゃ」

彼は目的の物を受け取ると帰ろうとした。……何だろう。…何でだろう。…何で、まだ居たいと思うんだろう。

「あ、あの！」

少し大きな声で呼び止める。ちゃんと聞こえたのかこっちを振り向いてくれた。

「さっきのお礼をしたいから、一緒にレストラン行きませんか？」

自分で言ったことが恥ずかしい。でも本心でもある。まだ彼と一緒に居たい。何故かそう思ったから。

少し考えてるのか、返事が少し遅かった。

「……うん。良いよ」

その時、彼の顔を見て私の気持ちは確信になった。……私は、彼が好きだ。名前も知らない彼に、一目惚れしていたのだ。

出会い？（後書き）

少し遅くなってすみません。

お読みになってくださってありがとうございます。

変なところやかしいところがあったら指摘してくださいとありがたいです。感想や質問をどんどん書いてくださって構いません。修正を入れる可能性あるのでご了承ください。それでは次回をお楽しみください

出会い？（前書き）

夏休みが明けたので土日のどっちかに更新します。末永く暖かい目で見守ってください。
メインキャラ以外はキャラ紹介しません。

出会い？

俺、滝川 薫は現在、携帯を拾ってくれた金髪美少女とレストランに居ます。……………なんでこうなった……………。約1時間ほど前…

「なあ薫。もう携帯買ったんだろ？アドレス交換しようぜ」
「買ったけど…、を付けるなを」

友達にツツコミながらポケットに入れてある携帯を探った。しかし目的の物は出なかった。なら反対だなと思えば反対側のポケを調べても見つからず、なら後ろポケ、バック、机とあらゆるところを探したが見つからなかった。

「どこいった…」

「買った次の日になくすとかお前すげえな…。家に忘れたとかじゃないのか？」

友達に飽きられながら記憶を遡った。朝出る時には持ってたし、

……………あ。

「あの時かあ……………」

「あの時って？」

「実はさ、今朝急いでて女の子とぶつかって荷物ぶちまけたんだよ。その時に落ちたのかも知れない」

「今朝急いでて女の子にぶつかるとかどこのマンガの展開だよ」

「仰る通りでございます」

友達に笑われながら自分に呆れてた。確か中心街のシンボルの時計の前だったよな？ぶつかった子が持つてるかな？何か言ってたし（急いでたからスルーしたけど）、携帯のことだったのかな…。もしそうだったら持つてるかも知れないな。ダメ元で行ってみるか…。

「俺携帯探しに行つてくる」

「アテでもあんの？」

「まだ笑うか。まあ一応は…」

半信半疑だが。そういえばぶつかつた子すごく可愛かつたな。…何か思い出したらドキドキしてきたな……。俺はその時、男の生理現象だと思つていた。その時は。

そして不良に絡まれてるこの子を助け現在に至ると…。うわゝ身体が熱くなつてきた。さつきまで良く平静で居られたな俺。ある意味不良どものおかげだけど…。

「あの…」

「ん？」

「さつきは助けに来てくれてありがとうございます。私、リンダ・リンスつて言います」

「ああ。そんな大層なことをやってないよ」

不良に絡まれたりしてる奴は良く助けてるから助けなれてるし…。…。アレで。にしても金髪美少女と一緒にレストランに居るっただけでドキドキするぜ。恥ずかしいもあるような照れもあるような嬉しいもあるような。感情がこんがらがっていた。

「あの、あなたのお名前は？」

「俺？俺は滝川 薫。今年から高校生だよ。言わなくても分かるか。俺は苦笑しながら顔が赤くならないように踏ん張ってた。変な風には思わられたく無いしな。あゝドキドキする。……。もしかして恋？そう考えたらすごくドキドキしてきた。うまく言葉では表せないが、すつごくドキドキしてきた。

「どうしたんですか？」

「い、いや何でも無い」

ちよつとわたわたする。少し考えたら意識しちまった。目合わせらんねえ……………。

「あの、お礼がしたいんで何か食べませんか？おごりますから」

「いや良いよ。申し訳ないし」

「お礼をしたいんです！折角助けて貰つたんだし……………」

リンダが顔を赤らめさせながら目を反らし、人差し指と人差し指

でツンツンし始めた。男の子と行くの初めてなのかな？俺も女の子と行くのは初めてだけどさ……。

「じゃ、じゃあ。お言葉に甘えさせて貰います」

「…はい！」

リンダがぱーっと笑顔になった。何が嬉しいんだろう？女の子はわからんな〜と思いつつもその笑顔を見れて満足している自分が居た。

俺は出来るだけ安めの物を頼んだ。リンダも安くて量が少ないのを選んだ。

最初は二人とも空気がぎこちなかったが、話すにつれ空気が柔らなくなっていく、二人とも普段の口調になった。少なくとも俺は。

色んな事を話しながら食事をした。話に夢中になってるうちに外はもう夕日が沈みかけ、夕方になっていた。

「もうこんな時間か……」

携帯を見ると五時を過ぎていた。

「そろそろお別れかな……」

リンダもどうやら帰る時間みたいだ。少々名残惜しいが仕方が無いか。

「じゃあ、そろそろ切り上げよっか」

そう言っただけ俺を席を立った。

「あ、待って！」

「ん？何？」

「折角出会えたんだしメアド交換しない？」

「ああ良いけど。」

そして俺はリンダとメアドを交換してお別れした。まさか電話帳に最初に載るのが（姉ちゃんを抜いて）金髪の美少女とは。そう考えると少しにやけてしまった。遅刻しかけたけど良い一日だったな。

「さて、家に帰るか……」

リンダの事を少し考えながら俺は帰路を目指した。

出会い？（後書き）

お読みになってくださってありがとうございます。

変なところやかしいところがあったら指摘してくださいとありがたいです。感想や質問をどんどん書いてくださって構いません。修正を入れる可能性あるのでご了承ください。それでは次回をお楽しみください

書いていると自然と文字数が増える物ですね。アハハ

出会い？

「ふんふんふん」

「……珍しいね、リンダが鼻歌を歌うなんて。良いことでもあった？」

「うん！あの後良いことがあって」

リンダは自分に酔っていた。それもそのはず、好きな人とレストランで一緒に食事して色んな話を話し、メアドも交換したのだ。恋する乙女にとつてこれほど嬉しいことは無いだろう。

「何があつたの？」

「うんとね。…あ、ちょっと待って」

「何？」

「ドアとか開いてないよね？」

リンダはそそくさと動き、ドアや窓を確認しては開いてるところを閉めた。リンダがこういう行動をする時はルームメイトであり親友であるアキに話す事があるか相談する時だ。リンダは全部の窓やドアをチェックするとアキの隣に座って話し始めた。

「それで？何があつたの？」

「うん あかね？携帯を拾った時計のここに行つて携帯の持ち主を待つてたんだよ。したらね、不良に絡まれちゃって」

「ええっ！？大丈夫なの？」

「うん。したらね、偶然携帯の持ち主が来て助けくれたの！助けに来てくれたりしないかな？って思ったら本当に来たんだよ？すごくない!？」

「へへ、そんな偶然もあるんだね。良かったじゃん。それで？」

「そしたらあつという間に不良達を倒したんだよ！殴りかかってきたのは二人だけ…」

「なんで殴りかかってきたの？」

「そいつ馬鹿だね。その持ち主を倒したら私と遊べると思つてぶち

のめそうとしてみたみたい。もう一人はその馬鹿がやられたから仕返しに殴りかかってきたけどこっちも簡単に終わっちゃった」

「本当にとんだ馬鹿だね。まさに大馬鹿。ところで持ち主の名前は分かるの？」

「あ、うん。滝川 薫って言うてた。私は薫って呼んでるけど」
「へへ滝川君ね。あ、続きをどうぞ」

「うん！それでね、お礼にねレストランに誘ったんだよ。そこで食事しながら色々な話を話したの」

「今日のスペシャルパフェ食べたよね？よく食べれたね…。」
「少ししか食べてないから大丈夫だよ！」

「お肉つかないと良いね。それで？その後の展開は？」

「メアド交換してさよならして現在に至ります。すごく楽しかった！好きな人とお話ししたり一緒に食事したりするのってすごく楽しくて幸せだった…。一緒に居るだけでドキドキするものなんだね…。でもお別れしたら少し寂しくて…切なかった。でも思い出すとまた幸せな気分になれて…。ポワワッ」

「あはは…。まだ恋したこと無いから良く分からないけど良かったね。幸せになれて。私たちの目標に近づいてるじゃん。」

「うん。そうなるけどちょっと違う気がするな…。」

「何で？」

「だって「みんなが幸せになる」が目標でしょ？私だけが近づいてもちよっと違う気がするな。」

「一理あるけど、結局は個人個人が幸せにならなきゃいけないだしさ。それにみんな同時に幸せになるなんて難しいでしょ？だから一応目標には近づいたよ」

「うん、そうだね…。」

「がんばってねリンダ。応援してるよ。リンダの恋」

「…うん。ありがとう…。」

「それに」

「それに？」

「リンドとかと話してるだけでも幸せだよ、私は。だからみんなも少しは幸せのはずだよ。「あの頃」よりは…ね」

「……うん！」

「わっ。抱きつくな！」

「だって嬉しいんだもん」

今思えば少しは人並みの幸せは掴んでるよね、私たち。「あの頃」よりは…きつと…。

出会い？（後書き）

お読みになってくださってありがとうございます。

変なところやかしいところがあったら指摘してくださいとありがたいです。感想や質問をどんどん書いてくださって構いません。修正を入れる可能性あるのでご了承ください。それでは次回をお楽しみください

恋愛感情のところは自分の体験談をもとにしています。きっとみんな同じ気持ちだよ、恋してるなら。

出会い？（前書き）

？飯のちゃんとしたやつです

出会い？

夕方の六時を切った。もう外は夕日が沈み暗くなっていた。

「頃合いだな……」

薫は外が暗いことを確認し、棚の暗い隅っところあるはずの無い黒い服とフード付きの黒いコート、黒い手袋を取り、着替えた。

「さあて、今日も張り切って悪党退治しますかね……」

薫はそう言つと窓から飛び降りた。

しかし、薫の姿は着地する前に消えていた。

近くでは不良達が話してた。酒を飲みながら話す奴も居ればタバコを吸いながら話す奴も居る。その話の内容はブラックカーネイジの事だった。

「今日もやつてたぜアイツのこと」

「またかよ。ヒーロー気取りかよ」

「でも結構やられてるのも本当だぜ？俺のダチの一味も全員しめられたつて」

「でも人を襲わなければ襲われないつて噂だぜ？」

「ああ、その通りだぜ？」

不良達が一斉に声のした方向に振り向く。だがそこには人の姿は無く、聞こえるのは声だけだった。

「お前達が誰かを襲わなければ俺は何もしないぜ？あん時だつてカツアゲ何かしてるから止めたら襲ってきたから返り討ちにしたただけだぜ？」

尚も誰も居ないところから声が聞こえる。不良達は見えない恐怖に襲われてた。一人の不良は近くの鉄の棒を手に取っていた。

「攻撃しないならこっちは何もしないぜ？だからその物騒な物は捨てな」

そう言つと不良の腕を誰かが握った。

「ひっ！」

不良の恐怖のあまりに鉄の棒を離してしまった。

「何もしなければ何もしない。別に意味も無く襲わないぜ。何もしなければ、な」

不良の腕を離し、それは静かに去って行った。

「これであいつらが悪いことしなければ良いんだけど」

歩きながら薫はふとつぶやいた。薫は意味も無く手を上げてはいない。不良が誰かを襲っていた場合のみ制裁を加える。それ以外はほとんどが注意や説得だ。今日はこれで3組目だった。

「今日は帰るかな。」

薫は時計を確かめる。

時間は10時を過ぎていた。

薫を家に向かった。暗闇と一緒にになりながら。

学力調査テスト！？

俺は今友達と近くのレストランに来てテスト勉強をしていた。前にリンダと食事をした場所だ。

学力調査テストで午前中に学校が終わったから飯を食べながらテスト勉強してるってわけ。

「なあなあ薫。ここはどうやって解くんだ？」

友人の一人が数学の質問をしてきた。自慢では無いが俺はそれなりに頭が良いのだ。

「ん？ああここね。これはまずaをこうやって求めてから代入して……」

「ああ解った解った！これをこうするのね」

「そうそう」

友人が理解したところで俺は自分の勉強に戻った。

ある程度勉強が終わって俺はジュースを飲みながら外を眺めていた。周りの友人は（もつとも俺含めて3人だけ）黙々と勉強をしていた。ノートを書く音とジュースを飲む音だけが俺らの席では流れていた。

ジュースが飲み終わってしまい暇になった。

友人達の方をチラリと見る。特に解らない問題が無いみたいだから俺は帰ることにした。

「俺帰るわ」

「解った」

俺は「じゃあな」と言いながら席を後にした。が、すぐに戻ってきた。

「どうしたの？」

「いや何でも」とか言いながら汗をダラダラ流している俺。

戻ってきた理由は一つ。後ろの席にリンダが居たから。

何故ここにリンドが居る…！

ここで帰ったらリンドに行くわし、友達に金髪美少女と知り合いたとばれたらこの後何されるか解らない…！運が悪ければ殺される…！

「ん？」

「どうしたのリンド？」

「今どっかで見たことのあるような人が一瞬視界に入ったような…？」

後ろの席から会話が聞こえる。確実にリンドだ。

頼む…！来ないでくれ！会いたいの俺もやまやまなんだが友達にばれるのは避けたい！でも何で会いたいんだろ？まあ気に入った奴に会いたいと思うのは普通だよな。そんなことを考えながら俺は席の隅っこに行っただ。

「お前何してんの？」

「いや俺のことは気にしないで良いからうん。気にしないで気にしないで」

「お前どうかしたのか？」

「ある意味あつてるかな？アハハ」

「まるでここでは会いたくない人に会ったみたいなきさだな」
鋭いなこいつ。

「さあ？」

「怪しいな」

「何のことやらサツパリ。そんなことより勉強しなさい！」

「余計に怪しいな」

「明日テストなんだから勉強しろ！」

「へいへい」

無理矢理言いくるめた…

「やっぱ薫だ！ヤッホ」

が終了のお知らせが来たようだ。

「よ、よう…リンド」

リンドは席を乗り越えて話しかけていた。

「こんなところで会うなんて奇遇だね」

「あ、ああ」

今この状況では会いたくなかったよリンドさん。

「何してるの？」

「友達と一緒にテスト勉強……」

恐る恐る友人達の方を見ると

「あ、俺用事思い出したから帰るわ」

「あ、俺も」

空気を読んで帰ってくれるようだ。

自分で頼んだ物の値段分の金額を置くと帰って行く友達達。

俺の隣を横切る時に友達の一人に軽く睨まれた。

ああ、明日俺は死ぬんですね

「どうしたの薰。この世の終わりみたいな顔して」

そんなことも知らずに話しかけてくるリンド。

今はこの時間を味わうとしよう。明日に備えて。

学力調査テスト！？（後書き）

お読みになってくださってありがとうございます。

変なところやかしいところがあったら指摘してくださいとありがたいです。感想や質問をどんどん書いてくださって構いません。修正を入れる可能性あるのでご了承ください。それでは次回をお楽しみください

学力調査テスト！？

「へ〜、そうなんだ」

あれから数分経ち、今はリンダと二人で席に座ってる。あの後リンダは一緒に居た茶髪の女の子と分かれてこっちの席に来た。代金は茶髪の子が払ってくれるらしい。

「意外と頭良いんだね薫は」

因みに今は何の勉強をしたか、何が得意かを話している。

「意外とは失礼な…」

「あはは、ごめんごめん。良くも無く悪くも無いイメージだったからさ」

「それなりに自信はあるんだぞ！中学校だって結構中の上ぐらいキープしてたんだから」

「へ〜」

リンダは簡単な会話をするだけで嬉しそうな顔をする、勿論俺も嬉しいし楽しい。そういえばリンダもテスト期間だから居るのかな？制服着てないけど

「なあ」

「何？」

「リンダもテスト期間で学校早く終わったの？」

「ああ、私学校行ってないんだ」

「はい？」

「学校行ってないの」

もしかして試験に落ちたのかな？だったら追求しない方が良いよね。

「あ、ああそうなんだ」

「あ、別に気にしないでね？落ちたとかじゃないから」

「え？じゃあ就職とか？」

「うん、そうだよ」

「どこで働いてるの？」

「何でも屋「ドリーム」って知ってる？」

「いや知らない。それに何でも屋？」

初めて聞く名前だ。名前からして何でもしてくれるっぽい所だけど…

「ここから少し離れたところにある店でね、頼まれたことを何でもする何でも屋なの。私含めて従業員は8

人。小さい店だよ」

まさかこの時代に何でも屋があるとは…。しかも従業員少ないし…。

「じゃあ今日は定休日かなんか？」

「うんそんな感じ」

「どんな事を頼まれたりするの？」

「ん〜？その時によるかな？工事の手伝いだったり製氷だったり色々」

その後やったことあるものを聞いた。他にはベビーシッターや浮気調査、盗まれた物を探したりペットを探したり。本当に色々やるらしい。因みに請け負えない物もあるらしい。何でも屋じゃ無いのかとツッコミたいがあえて何も言わないことにした。

1番きつかったのはベビーシッターらしい。特にミルクあげ。

良く来るのは製氷らしく、どうやら氷系の能力者が居るらしい。

他の人も能力者が聞いたが企業秘密だから言えないらしい。さっき言ってたけどね。

「まあそんなところかな？そう言えば薫の趣味って何？」

「ん？俺？俺は運動にゲームにマンガかな？」

「普通だね」

「そういうリンドアは？」

「私？私は少女漫画に恋愛小説、あと節約に裁縫だね。良くぬいぐるみ作ったりするよ。熊さんとか」

「おお凄い。そして以外」

「むっ。何が？」

「女の子ってシヨツピングが趣味だと思ってた」

「確かにシヨツピングが好きなのはいい居るけど私はあんまり買物はないな。お金が勿体なくてさ……」

「守銭奴？」

「違う」

からかったら軽くチョップされた。

「いて」

「必要な物しか買わないだけ。使う時は使うけどね」

「へっ」

ブー！ブー！ブー！ブー！

不意に誰かの携帯が鳴った。

「あ、ごめん私だ」

どうやらリンダらしい。電話らしく、席を離れて化粧室に向かっていった。

数分経つとリンダが戻ってきた。

「ごめん、急用が出来ちゃった。先に帰るね」

「ああ分かった」

まあリンダが帰るなら俺も帰るけどね。リンダと話すために居たわけだし。当初の目的は違うけど。

リンダが帰るのを見送ってから会計を済ました。やることも特にないので家に帰ることにした。

学力調査テスト！？（後書き）

お読みになってくださってありがとうございます。

変なところやかしいところがあったら指摘してくださいとありがたいです。感想や質問をどんどん書いてくださって構いません。修正を入れる可能性あるのでご了承ください。それでは次回をお楽しみください

学力調査テスト！？（前書き）

先週更新できなくて誠にすみません

こんな事は二度とならないようにします。更新できない時は事前に活動報告で言う事にします。（用事など体調不良、ネタが思いつかなかつたなどが理由で）

後4月12日？は修正しました

学力調査テスト！？

「ただいま」

返事は無かった。外にも車は無かったし、まだ帰ってきてないの
だろう。薫は踵で靴を脱ぎ、2階にある自分の部屋に向かった。

カバンを部屋の隅の放り投げてベットに寝転んだ。

薫は天井を眺めながら自然とリンダの事を考えていた。

：今思うとリンダって凄く可愛いよな。腰ぐらゐまで伸びた金髪
も凄く綺麗だし、ってそんなこと考えてる場合じゃ無いじゃん。洗
濯物洗濯物。

薫はベランダに干しっぱなしの洗濯物を思い出し駆け足でベラン
ダに向かった。

洗濯物を取り込んでいると車が停車する音が聞こえた。ベランダ
から外を覗くと薫の姉、滝川 翔子が帰ってきた。

薫はさっさと洗濯物を取り込み終わらし、一階に行き翔子を出迎
えた。

「姉ちゃんおかえり」

「ああ、ただいま」

そう言つと翔子さっさとリビングに行き、椅子に座った。

「薫、コーヒー用意して」

「へいへい」

正直面倒だったが疲れている事を考慮してに仕方なくコーヒーを
用意する準備を始めた。

「仕事お疲れ様」

自分の分と姉ちゃんの分を用意しながら話しかける。

「もうクタクタ。そういう薫は高校生活どうなのよ」

「ん、充実してるよ」

「は、あ、学生時代に戻りたいなちくしょー！」

「自分で統制機構に入ったくせに」

統制機構。それは能力者を統制する機関。と言っても警察の特殊部隊みたいな物だ。対能力者犯罪を主とし、能力者とエリートで構築されている部隊。SEED関連の事は全部ここが管理している。因みにここには今までどういうSEEDがあっただかもまとめているし、個人個人がどういう能力を持っているかも知られている。一部判明されていないの人が居るが（俺の新しい能力とか）。

「それとこれは別よ。てかあんたも将来SEED統制機構に入るんでしょ？」

「うん、そうだよ。はい、コーヒー」

「サンキュ。今更言うのもアレだけどなんで統制機構の学校に入らなかったのよ」

「あれ大学からでも入れるでしょ？だから今のうちに高校生活を満喫しようと思って」

「青春つて良いな」

「まだ青春してないよ」

本当はしているんだけどねっとなんか心の中で言った。

「はあ〜」

「何ため息着いてるの？幸せ逃げるよ？」

「迷信よそんなの。いや、彼氏出来ないかなって」

「まずそのめんどくさがり屋直せばまだマシなんじゃ無い？」

「うっせ。個性と言え」

「嫌な個性だね」

「そう言つと姉ちゃんが落ち込んだ。何ともめんどくさい人だ。」

「もういい、疲れたから寝る」

あ、拗ねた。そのまま俺の横を通り過ぎて二階にある自分の部屋に向かつていった。

ドアが閉まる音がした。姉ちゃんが残したコーヒーを自分のと一緒で飲み干して台所に置いた。

「さて、皿洗いして晩飯でも作るか。今日は姉ちゃんの好物にでもするかな」

今日のメニューを考えながら皿を洗い始めた。

学力調査テスト！？（前書き）

本文で紹介したので翔子の説明はしません

学力調査テスト!?

夕食を取り終わって部屋でテスト勉強していると突然携帯が鳴り出した。携帯を開いてみると友達からのメールだった。内容は…

『リア充爆発しろ』

だった。昼のことを言っているのだろうか、てかテスト勉強しろ。『そんな事やってる暇あるならテスト勉強しろよ』と返信したらすぐに返ってきた。今度は…

『うるせー！入学当初から金髪美少女の彼女とイチャイチャしゃがって!!!”〇(皿メ;)〇”』

彼女と来たか…。しかも結構怒ってるし、この場合は嫉妬だけど。俺とリンダが彼女ねえ……。想像したらドキドキしてきたからやめた。取り敢えず返信するか。

『いや、彼女じゃ無いからな…? (〃〃〃:』

『じゃあ証拠見せる! (#、(凸』

いやいやいや、証拠って何だよ、どうゆうもん見せれば良いんだよわかんねえよ。取り敢えずそう言うか。

『いやいや、証拠って何を見せれば良いの? ;、(』

『そうだな……、携帯見せる!メールの内容見せる! (。。

* (ビシッ』

メールの内容か…。リンダとのメールの内容を見返してみた。特にメールはしていなかった。これで誤解が解けると安堵しながら返信した。

『良いよ』

『絶対メール削除するなよ!したらぶちのめす!! (#。。(と、まあこれが俺等の総意だ』

どれだけに知られたのか気になったから返信したら…

『え?もう全員だけ?』

おまつ。てかどれだけぶちのめしたいの!?!しかも総意って…。

まあ冗談だろうけど

『お前等…（。°。*）』

『安心しろ、彼女じゃ無ければ何もしない、等。彼女に発展したら祝福しつつ殺す』

『祝福になつてねえ…（*°□）』

『大丈夫大丈夫実際何もしないから。少なくとも俺は祝福するから（^ ^）』

その後、メールをしながらテスト勉強をした。メールで友達が解らないところを教えたり俺が解らないところを教えて貰ったり教え合いながら勉強をした。

学力調査テスト！？（後書き）

今回は短い内容となっています。顔文字はメールの時だけ使用します。

後々追加したり修正したりする可能性がありますのでご了承ください。

学力調査テスト！？ Re（前書き）

大幅に書き足したので出し直しました

学力調査テスト!? Re

学力調査テスト当日

「よっ、薫おはよ〜」

「お〜原井。おはよ〜」

「今日は早いな」

「まあね、なんか早く起きちゃってさ」

そう。昨日は結構夜遅くまで勉強してたから寝坊するかと思ったけど何故か早起きできた。早起きして登校すると清々しいよね。

「にしてもお前いつもこの時間帯に来てんの?」

「ああそうだよ。バス通学なんで」

「あ〜そう言えばそうだったけ」

そりゃバス通学ならいつも早いわけだ納得。

「あ、そうだ」

「何だ?」

「早速携帯見せろ」

「いきなりだなおい」

「だって昨日約束したじゃん」

「確かにそうだけど…、勉強は良いの?」

「昨日一緒にやったじゃん」

「メールだけだな」

俺はズボンのポケットから携帯を取り出すと原井に渡した。

「ほい」

「どれどれ」

見ても何も無いけどな。

「あ、本当に無い」

「言っただろ?違っつて」

「消してないよな?」

「消してないわ。ところでみんなって俺らの仲の奴らだよな?」

「ああ勿論だよ。流石に入学して間もないのにクラス全員に広めるわけ無いじゃん。まず興味ないだろうし」

「だよな。そう言えば今日のテストは数学と英語だよな」

「そうだよ。昨日のテスト順は酷いと思います」

「あゝ、だよな」

昨日の内容は一時間目国語、二時間目理科、三時間目が社会なのだ。先生まじ鬼畜。

「てかさ、英語勉強した？」

「一応した」

「薰って英語出来る方？」

「出来ない方」

「基本何点ぐらい？」

「40点から50点」

「同じ位か」

「ああ」

「英語とかマジ無理」

「だよな」

原井と話していると不意に教室のドアが開いた。入ってきた人物はそのまま俺の所に来て…

「リア充爆発しろ！！」

と同時に全力の回し蹴りを繰り出してきた。

「当たるかああああ！！」

頭を屈ませて避けた。ちよつとだけ髪の毛にかすつたが問題ない。

「能力使つて避けんな！！」

「能力使わないと普通に喰らいますからね！？俺のSEEDが「ス身体強化タイルアップ」じゃないと当たるからね！？」

「うっせ！！当たつて死ね！！」

「お前空手部だろうが！！冗談になんねえよ！！」

「良いから見せろ！！」

「自分勝手だなおい！！」

「あははは!!」

さつきから俺たちの攻防を見てた原井が笑い始めた。まあ笑うよね、俺は必死だけど!!

「はいはいほらよ」

「どれどれ。げっ、ねえ。まじでねえ」

「言つたるうが。てかお前あの後勉強は？」

「え？何それ美味しいの？」

やはりやってないかこのスポーツ馬鹿。

「今スポーツ馬鹿って思つたる」

「何故分かつたし」

「顔が語っている！」

「しまった！」

「取り敢えず教えて！」

「何でだよ!？」

結局、スポーツ馬鹿こと篠本に数学を教えた。公式だけだけどな。

そして一時間目の数学のテストが終わった。一心心配して篠本のところに行った。

「結構できた！」

「出来なきやおかしいだろお前……」

今回の数学のテストは中学の基本問題しか無かった。学力調査テストだからか、基本的な物しか出なくて簡単だった。

「原井達は？」

近くに来ていた原井達に聞いてみた。因みに他の二人は遅刻寸前で来た。

「出来た」

「同じく」

「オワタ」

一人できなかつたらしい。まあこいつは昔から数学とか出来なかつたしな。

「まじ数学とか無理」
「でもお前他は出来るよな」
「ドヤツ？」
「さあ英語勉強しようぜ」
「スルー!？」

そして英語のテストが終わった。
さて篠本は：あ、机に突っ伏しながら頭から煙り出してる。そこまで頭使ったのか。原井はっと、もう帰る準備してる。取り敢えず篠本起こして帰るか。

「おい篠本起きろ」
「へへっ、もう終わりだ…赤点確定だ…」
「明日挽回しような。取り敢えず帰ろうぜ」
「おう」

直ぐに篠本は起きて支度を始めた。
「帰ろうぜ」

原井は準備が終わってこっちに来てた。

「お、もうちよっと待っててくれ」
「今日もファミレスで勉強すんの？」
「今日は良いだろ。明日は保健と家庭科なんだから」
「それもそうだな」
「…よし。帰るか」
「お」

翌日のテスト明け

「じゃあ俺達部活あるから行くわ」
「ああ、じゃあな」
テストが終わって部活に入っていない俺以外の四人は部活に向かった。俺は今日どうするかな？

校門を出て少し歩いてたらふと思い出した。以前にリンダが何で

も屋で働いていると言っていたことを思いだしたのだ。予定もない
し気になったから薫は何でも屋「ドリーム」がある中央街に向かっ
た。

「確かここから少し先だったな……」

街の地図を見ながら何でも屋「ドリーム」を探していた。良く行
くファミレスの先を1?位歩いた先に小さい店があった。…何でも
屋「ドリーム」。どうやらこのようだ。2階建てではあるが確か
に小さい店だ。

店を見ていると玄關らしきところから少年が一人出て来た。ひじ
ょうに目立つ格好だった。いや、この季節には場違いな服装をして
いた。

春の真っ最中だというのに長いマフラーで顔半分を埋めており、
膝まである白い防寒コートを着込み、腰の部分までコートのボタン
を閉め、コートのポケットに手をつっ込んでいた。その少年は薫の
隣を通ってきた。そこで初めて薫は彼の顔を見た。

髪は銀髪で、ライオンのような鬣たてがみに似た髪型をしており、クール
そうな顔つきをしていた。少年が通り過ぎると少し寒い風が取り抜
けた。そこで薫は気付いた。自分と同じ能力者であると。能力者は
SEEDが強力過ぎると影響が出ることを出したのだ。

例えば炎のSEEDが強力だと常人より常温が高いなど。彼の場
合は氷のSEEDが強力過ぎるから身体が冷気を出しているのだろ
う。薫は納得し、店の方に向かっていった。

特に特徴は無さそうだった。どうやら一階部分は家になっている
ようだ。外に二階に行く階段が取り付けられていて階段の隣に「
事務所はこちら」と看板が取り付けられていた。さつき見えた何で
も屋ドリームは二階の窓に書かれている物だった。薫はある程度観
察して帰ることにした。

友として？黒き暗殺者として？？（前書き）

今回から遂にバトル編が入ります。

友として？黒き暗殺者として？？

夜、自室の部屋でマンガを読んでいると不意に携帯が鳴り出した。薫は少し驚いてから携帯のバイブレーションを止めて確認した。篠本からのメールだった。内容は：

『助けて 港 テロ』

と、妙なメールだった。しかも本文では無く件名に書いていた。薫はこれが直ぐに冗談では無くマジだと気付いた。この港でテロが行われる、もしくはその準備がされている。それを目撃してしまつたため捕まる前にメールをしたのだと判断した。直ぐに助けに行こうとしたがピタツと仕度を止めた。それは篠本にブラックカーネイジの正体がばれてしまうからだ。薫に助けてとメールして何故ブラックカーネイジがくるのかと思うだろう。それが不安だった。助けに行けば確実にばれる。でも友達は見捨てられない。そんな葛藤が薫の心の中で渦巻く。そして、薫が決断した答えは……

篠本はテロリスト「芽潰し」に捕まり、縛り付けられていた。

「リーダー！何でこいつを殺さないんです！俺たちのことを見たんですぜ！？」

「馬鹿野郎！」

バキィ！

リーダーと呼ばれた男はその男を殴つた。

「うぐっ！？」

「お前は何回言つたら解るんだ！？俺たちの標的は能力者だ！SEEDを持たない者は無闇に殺さんで良い！！」

「でも見られたんですぜ！？」

「殺さず捕まえておけば十分だ！」

二人のやり取りを聞きながら篠本は考えた。

薫にメールしてもう数分経つな。もう統制機構に連絡してくれたかな？メールはちゃんと削除したから大丈夫だろう。にしても、急いでるからって港を通るんじゃない無かったぜ。ちゃんと学校の言う事は信じとくべきだった。そうすればこんな恐い思いはしなかったのによ……。

篠本は、学校の部活が長引いてしまい、急いで帰ろうと思って港を通って行ったら芽潰しの武器輸出を目撃してしまい、運悪く捕まってしまった。そして、さっきの男に殺されそうになったがリーダーと呼ばれる男が助けてくれたのだ。リーダーと呼ばれる男は自分たちのテロが終わるまで篠本を捕縛して捕まえたのだ。安全は保証すると言っ言葉信じ篠本はおとなしくしている。

しかし、このテロは止めたいのが本心。でも所詮はただの高校生。何も出来ない。だから統制機構に姉が居る薫に頼ったのだ。：薫、頼むぜ。そう思い、篠本は空を見た。空は、満月が出ていてとても綺麗だった…。

友として？黒き暗殺者として？？（後書き）

区切りが良いのでここで区切ります。修正などあとで加えるかも知れませんが。次回にご期待ください。

友として？黒き暗殺者として？？

「さて、どうやって闘うか…」

薫はそんなことを考えながら夜道を走っていた。

俺の能力「スタイルアップ身体強化」は運動能力を100%引き出す能力。成人男性が相手でも充分勝てる。相手が凶器を持っていなかったらな。相手はテロリスト、銃器を持つてる可能性が大だ。いくら「スタイルアップ身体強化」でも避けきれぬ自信は無い。

それに刃物の可能性も無くは無。刃物なら勝機はあるけど、1回でも刺されたらアウトだ。相手は戦闘のプロかも知れないし。…
…やっぱり、ブラックカーネイジ黒き暗殺者として闘うしか無いか。

薫の服装はブラックカーネイジ黒き暗殺者の服装だ。そして薫は、友達として篠本を助けに行き、ブラックカーネイジ黒き暗殺者として闘うことにしたのだ。

家を出て約30分後に薫は港に着いた。薫は直ぐに近くのコンテナに隠れて様子を見た。

テロリストの数は、1人、2人、3人。武器は……スタンロッドか？銃器じゃなくて良かったけど、刃物より最悪じゃ無いか！くそっ！

所で篠本は……居た。テロリストの近くに有るコンテナ付近に縛られて座っていた。

さて、どうやって助けるか…。篠本はコンテナの影の中に居るから良いけど、テロリスト達は月の光の中に居るから、俺のもう一つの能力範囲外だ。こんな時に満月とは…最悪だぜ。俺のもう一つの能力、「ブラックシャドウ暗闇同化」は対象が暗闇や影の中なら同化させることが出来る、そして暗闇や影の中を自由に動ける能力。簡単に言うると暗闇や影の中に入れるって事だ。刃物なら刺されても服の中の影に同化させて防げたのに…。これじゃあ意味がねえじゃん。何のために黒い服装してるんだか…。

薫はただ考えた。どうやってあの3人を出し抜き篠本を助けるか。

生憎篠本まで繋がっている影が近くに無い。薫は場所を変えながら考えた……。移動していると影では無かった場所が影になっていることに気付いた。

「……………そうだ！雲は！？そう思い薫は天を仰いだ。雲は月の近くまでに来ていた。」

「ナイス！雲があと少しで月を隠してくれる！そうすれば影が出来て同化できる！よし！これなら……！」

「……………そして、雲が月と重なった。雲が月に重なり港全体は暗闇に支配された。」

「今だ！」

薫は月が重なると同時に動き出した。即座に暗闇に同化しながら篠本が居る場所まで走った。勿論影と同化しているから気配も足音もしない。

「よし、完璧……！」

薫はそう思った。だが、現実はそうは行かなかった。

「タバコでも吸うか」

突如篠本が一番近いテロリストがタバコに火を付け始めたのだ。

「いいいつ！？やばい！」ブラックシャドウ「暗闇同化」は発動中に光が当たると能力

が解除さちまうんだ！しかも「スタイルアップ身体強化」と併用出来ないから今は標準の運動能力！間に合ってくれー！！

「シューッ！」

「うおっ！？」

テロリストがタバコに火を付けたと同時に薫は篠本はコンテナの影に同化させた。そして、火の光が薫に当たり、能力は解除された。

「ん？どうし……誰だてめえ！？」

「ただの通りすがりのヒーローさ……」

友として？黒き暗殺者として？？（後書き）

お読み下さってありがとうございます。次回の更新は来週の土日です。

友として？黒き暗殺者として？？

『どうだ？あいつらの動きは？』

通信機越しから聞こえる男の声に静かな声で返答する。

「…………黒い服の男が捕虜をどっかに隠してテロリストと闘っている…………」

長いマフラーを風に泳がしながら双眼鏡の先で起きてることを的確に答える。

『黒い服の男？まあ良い。そいつは勝てそうか？』

「ああ…………」

『よし、ならテロリストの迎撃はそいつに任せて貰えますか。隙を見て奴らが乗ってきた貨物船に潜入してくれ。お前の能力なら簡単だろ？』

「ああ…………」

『潜入に成功したらGPSを発信させる。そうすれば雨宮の能力でこっちに運べる。頼むぜ』

「了解…………」

通信機を切り、双眼鏡で港を覗いた。いつの間にか黒い服の男はテロリストを1人倒していた。

「頃合いか…………」

彼、イールも港へと向かっていった。テロリストの武器を奪いに自分たちを襲おうとしたテロリストから。

「てめえ！さっきのガキをどこにやりやがった!？」

テロリストの1人はそう言いながら手に持っているスタンロッドにスイッチを入れた。

「教えねえよバーカ」

「この糞能力者が!!」

持っているスタンロッドを大きく振り上げる。どうやら殺す気満

々らしい。薫は振り下ろされたスタンロッドを右に避けて直ぐに距離を取る。相手はまだ1人、後ろから残りの2人が来るのが見える。今のうちにこいつを倒さなければいけない。

「死ねよ!!!」

また大ぶりでスタンロッドを振り下ろそうとしている。

今度は避けずながら空きになった胴体に目掛けて後ろ回し蹴りを喰らわした。

「うげっ!!!」

テロリストが怯んだ隙に手に持つてるスタンロッドを奪い、ぶち込んだ。

「ぎゃあああああ!!!」

テロリストは苦痛の叫びを上げながら倒れた。薫は心が少し痛んだが今はそんなことを思っている場合では無い。他の2人が迫ってきている。近くのコンテナに飛び乗り、広いところに出た。

「待て!!!」

1人は直ぐにこっちに来た。もう1人は倒れた仲間の方に行ったようだ。

「どこでこのことを知った!？」

こっちに来た1人が質問してきたが、無言で返した。言えば篠本が危険だからだ。

「答えるつもりは無いって訳か、なら聞き出してやるよ!!!」

テロリストがこっちに迫ってくる。スタンロッドで殴りかかってきたが後ろに避けた。すかさず追撃を加えてきたがそれも難なく避けた。

「くそっ!こいつの能力は「透明^{クリア}」の類いじゃ無いのかよ!!!」

薫はテロリストからの攻撃をずっと避けていた。何かを待つように。

「おい!逃げるぞ!」

気付くと最後の1人が倒したテロリストを貨物船に運び逃げる準備をし始めていた。

「しかしリーダー！」

「一時撤退だ！退くぞ！！」

「…ちつ、了解！」

テロリストは薫を攻撃するのを辞め、貨物船へと向かった。薫は追いかけてようとしなかった。篠本の安全が第一だからだ。影と一体化させた位置へと向かおうとしたが予想外の出来事が起きた。

「うわあああああああ！！！」

突如テロリストが悲鳴を上げた。そして、悲鳴と同時に貨物船から氷塊が尽きだしてきた。2人のテロリストが腕や脚の一部が氷塊の中に入っており、身動きが取れていなかった。

何が起きたか理解できず、薫はただぼーっと見つめているしか無かった。

突如サイレンが鳴り、我に返った。どうやら呼んでおいた統制機構が到着したようだ。薫は直ぐに篠本を隠した場所に行き、能力を解除した。

「……お前は？」

篠本が聞いてきたが、薫は無視してその場を立ち去った。

友として？黒き暗殺者として？？（後書き）

お読みになって下さい、ありがとうございました。
今度の更新は来週の土日を予定しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1071w/>

SEED

2011年12月4日01時46分発行